

市川良文氏は以下三点について、質問を行った。一点目は、契丹仏教と北宋仏教の関係性、二点目は、契丹の学僧は他地域からやってきた僧なのかという点、三点目は、唐代では法身舍利というと縁起法頌と理解されるが、それが金剛界大日如来などを法身舍利とする理解がいつ頃から出てくるのかという点である。

藤原氏は一点目について、大蔵經を含めた經典類に関しては、高麗や西ウイグルを通して北宋に流入していると答えた。また、契丹仏教にもわずかながら禅宗の影響が見られるとした。更に、北宋など他地域から国境を越えて契丹へ戒を受けに来るものがあり、このような点からも契丹と北宋の関係を見出すことができると藤原氏は述べた。二点目について



では、契丹の学僧は契丹の領域内にいた漢人と契丹皇族出身者がほとんどであり、外部からやって来た者もいるが詳細は不明であると答えた。三点目については、朝陽北塔の最上階に法舍利頌が刻まれているため、これが法身舍利だと分かる。このような理解は朝陽北塔の事例が初見かもしれないと藤原氏は述べた。



2013年度 第1回 中国仏教石刻研究会 [ユニット3 (東アジア地域班)]

- 報告題目：安村道俗一百餘人修塔記
- 開催日時：2013年4月27日（土）14:00～17:00
- 場所：龍谷大学大宮学舎仏教史学合同研究室
- 報告者：桐原孝見（龍谷大学大学院）
- 参加者：8人

【報告の概要】

「安村道俗一百餘人修塔記」

この碑は東魏天平4年（537）の年号を有し、河南省新郷市獲嘉県にあったとされる。縦56センチ、横73センチの横長の石碑で、中央に小さな仏龕があり、向かって右側に銘文が刻まれている。銘文から、この碑が作られる以前から当地に尼寺があり、大きな塔像が存在していたことが確認できる。年月が経って塔像の痛みが激しくなってきたため、「獲嘉県安村」の道俗100人あまりが集まって100日かけてこれを修復したという。「道俗」という表現から、この事業に出家者が関わっていた様子が看取できる。また銘文の冒頭では、自

身の功德が積み重なり、塔像を建てるという事業に至ることが示されており、このような事業は自身の積み上げた功德を可視的に示す一つの方法であったと考えることができる。ただし、銘文全体には抽象的な表現が多用されており、供養者の姓名も刻まれていないため、具体的な事業の内容は把握しにくい。なお銘文中に見える「安村」は、現在も獲嘉県に存在している。

この碑が発見された河南省新郷市一帯では、大型の造像碑がいくつか発見されており、当地における民衆と仏教の関係を探るための重要な史料となる。



2013年度 第2回 中国仏教石刻研究会 [ユニット3 (東アジア地域班)]

- 報告題目：東魏武定元年 道俗九十人造像記
- 開催日時：2013年5月25日（土）14:00～17:00
- 場所：龍谷大学大宮学舎仏教史学合同研究室
- 報告者：平 法子（龍谷大学大学院）、白川梨香（龍谷大学卒業生）
- 参加者：8人

【報告の概要】

「東魏武定元年 道俗九十人造像記」

この碑は東魏武定元年（543）の年号を有し、河南省河内で発見され、現在は河南省博物院に所蔵されている。造像の中心となったのは当地に赴任してきた陽平の路氏と、僧が指導する河内郡の邑義である。実際、供養者として数名の「邑師」「比丘」の姿が描かれており、願文にも仏教的な用語が多用されている。供養者の中には女性が多く含まれており、「邑母」と記されているところに特徴がある。更に供養者名を整理すると、陽平の路氏と広平の宋氏の間に婚姻関係があった様子が看取できる。一方、碑陰には『太子瑞応本起経』や『太子須大拏経』などに見られる説話をモチーフとした線画が刻まれており、当地における仏教受容の一側面を垣間見ることができる。

また、今回参考にした顔娟英主編『北朝佛教石刻拓片百品』（中央研究院歴史語言研究所、2008年）の移録には、数カ所誤りがあることが確認された。



2013年度 第3回 中国仏教石刻研究会 [ユニット3 (東アジア地域班)]

- 報告題目：李氏合邑造像碑
- 開催日時：2013年6月29日（土）14:00～17:00

- 場所 : 龍谷大学大宮学舎仏教史学合同研究室
- 報告者 : 赤羽奈津子 (BARC リサーチアシスタント), 桐原孝見 (龍谷大学大学院)
- 参加者 : 8 人

【報告の概要】

「李氏合邑造像碑」

この碑は東魏興和四年（542）の年号を有し、現在は河南省博物院に所蔵されている。出土地は河南省滑県ないしは河北省正定県とされるが、銘文中には「大河北岸」という語が確認できるため、元々は黄河の北岸に位置する河南省滑県にあった可能性が高いと考えられる。銘文中に「出自趙壘，因官爰處」とあるように、碑文を建立したのは趙郡李氏出身の李次・李頤族らであり、先祖の就官を契機に当地に在住するようになったという。銘文の前半では趙郡李氏の繁栄とともに、代々深く仏教を信仰してきたことが示されている。更に銘文には『妙法蓮華経』『肇論』などを典拠とする語が引用されており、同時代に当地に広まっていた仏典の有様を知ることができる。

また、今回参考にした顔娟英主編『北朝佛教石刻拓片百品』（中央研究院歴史語言研究所，2008 年）には、碑陽の銘文部分しか掲載されていないが、『魯迅輯校石刻手稿』掲載の移録によると、碑陰に多くの供養者名が記されていることが確認できる。



2013年度 第4回 中国仏教石刻研究会 [ユニット3 (東アジア地域班)]

- 報告題目 : 李贊邑等邑義五百餘人造像碑
- 開催日時 : 2013 年 7 月 13 日 (土) 14:00～17:00
- 場所 : 龍谷大学大宮学舎仏教史学合同研究室
- 報告者 : 中田和宏 (龍谷大学卒業生)
- 参加者 : 5 人

【報告の概要】

「李贊邑等邑義五百餘人造像碑」

この碑は東魏武定元年（543）の年号を有し、河南省淇県で発見され、現在はニューヨークのメトロポリタン美術館に展示されている。銘文によると、汲郡の 500 人ほどの邑義が主体となり、約 10 年かけて仏像と寺院を建立したとされる。その主な支援者は「赫連子悦」という人物である。赫連子悦は『北史』『北齊書』に記載がある他、「赫連子悦墓誌」によってその事績が確認できるが、それぞれによって人物像が異なっている。また、銘文には『妙法蓮華経』『大般涅槃経』の他に道教的な用語が使用され、当時の知識人や僧の仏教理

解の一端を示している。

碑陽の願文上部には、本尊の坐仏の他に『維摩經』をモチーフとした彫刻が刻まれている。碑陰には千仏と供養者名が刻まれているが、今回参考にした顔娟英主編『北朝佛教石刻拓片百品』（中央研究院歴史語言研究所，2008年）では省略されている。



2013年度 第5回 中国仏教石刻研究会 [ユニット3（東アジア地域班）]

- 報告題目：山西省晋城市陽城県「上官氏等合邑造釋迦仏像摩崖」
- 開催日時：2013年10月12日（土）11:00～15:00
- 場所：龍谷大学大宮学舎白亜館2階共同研究室1
- 報告者：北村一仁（龍谷大学非常勤講師，2013年度 BARC 公募研究員）
- 参加者：5人

【報告の概要】

「上官氏等合邑造釋迦仏像摩崖」

これは、北齊天保6年（555）9月20日の紀年を有し、中国山西省晋城市陽城県次宮鎮周壁村に現存する磨崖造像である。発願主は上官頤願と上官達であり、他の供養者も全てが上官氏とその親族である。この磨崖に関しては、これまでに『三晋石刻大全 晋城市陽城県卷』（三晋出版社，2011）に写真と移録があったが、共に不十分なものであった。そこで報告者は、公募研究の一部として本年7月に現地調査を行った。本報告はその成果である。

この磨崖には仏龕（釈迦及び阿難・迦葉か）を中心に、沙門像・寄進者像（男女）が多く刻まれ、下部には願文と、明代の後刻文が見られる。願文の内容は、まず冒頭で釈迦の事績が述べられ、次いで釈迦寂滅後末法の世に生まれた上官頤願・上官達が置かれていた状況が詳細に記されている。それによれば、当地は東魏北齊と西魏北周との境界地区にあたり、西魏の將で正史にも伝がある楊標の侵攻をしばしば蒙っていた。このような状況の下、上官氏は一貫して東魏・北齊に忠誠を尽くし、その功績によって官職を与えられ、当地の守備を委ねられるに至ったという。また明刻部分には、上官氏の子孫たちが、北齊より千年を経て磨滅した像を修復した経緯が記され、同時にさらに後世に受け継がれていくようにという願いも示されている。

この磨崖は、北朝期東西政権間の国境地域に点在する軍事拠点における仏教信仰の実態、そして仏教と当地の人々・政権との関係を考えていく際の一次史料として、非常に貴重なものであると同時に、ある一族が如何に仏教を信仰し、それが子孫によって如何に受け継がれたのか、ということを示す好例でもある。



2013年度 第6回 中国仏教石刻研究会 [ユニット3 (東アジア地域班)]

- 報告題目：北朝国境地域における仏教造像事業と地域社会
—山西陽城出土、上官氏造像を手掛かりとして—
- 開催日時：2013年12月21日(土) 15:00～17:00
- 場所：龍谷大学大宮学舎清風館3階共同研究室1
- 報告者：北村一仁(龍谷大学非常勤講師, 2013年度 BARC 公募研究員)
- 参加者：6人

【報告の概要】

本報告は、前回の報告に引き続き、「上官氏摩崖造像記」及び伝世文献史料に基づき、北朝期の山西省陽城県(当時の安平郡)に存在した周壁及び、当地に居住する上官氏一族をめぐる斉周両政権の動向について考察したものである。

北村氏は同造像記について、まず時間的・空間的・人的という側面から、それぞれ検討を加えた。時間的側面については、願文中に記される紀年に誤りがあるのではないかということ指摘し、同造像記に描かれている時期より完成に至る約17年間、当地は少なくとも二度に亘り、西魏北周の将軍・楊標による蹂躪を受けたと述べた。次いで空間的側面については、周壁が東西両政権の境界に位置すると共に、ほぼ楊標の進軍路上にあったとし、東魏北齊・西魏北周両政権が繰り広げた抗争の真っ只中に置かれていたことを指摘した。最後に造像記に記される人的側面についても考察し、この造像は、上官頤願・上官達を中心とする上官氏一族とその姻戚によるものであり、一方で沙門も参加していた形跡はあるが、その具体像は不明な点が多いと述べた。

それから上記の検討を踏まえ、当摩崖の内容と造像の意図について考察を加えた。その特徴として、この地域での上官氏と楊標を中軸とする政治・軍事情勢が詳細に描写され、加えて上官氏の北齊に対する忠誠を強調して描かれているなど、政治的な色彩が非常に濃厚であること、そして家族安穩のような願目はなく、私的な祈願は希薄であることを指摘した。

最後に、北朝の国境地域に点在する軍事拠点において、多くの大型造像事業が行われていることに言及し、これらの造像記は、最前線で生きる人々が血縁・地縁・官縁によって集い、仏をよすがとして繋がりを得ようとした証であると同時に、国号を掲げ、皇帝や政権を称揚することによって、東西いずれかの政権を支持し保護を得ようと企図した取り組みの痕跡とみることができる、と述べた。

報告後、参加者より、北周の将軍楊標の事跡、特に周壁より王屋山を隔てた向かいに位置する山西省垣曲県宋村で行った奉仏造像事業についても言及し、そうした環境の中で、

摩崖仏を造営した上官氏の立場を検討するなど、様々な可能性を考えるべきではないかという意見が出された。



2013年度 第7回 中国仏教石刻研究会 [ユニット3 (東アジア地域班)]

- 報告題目：古代朝鮮半島における仏教と対外関係—高句麗・百済を中心に—
- 開催日時：2014年2月15日（土）14:00～17:00
- 場所：龍谷大学大宮学舎白亜館2階共同研究室1
- 報告者：赤羽奈津子(BARC リサーチアシスタント)
- 参加者：5人

【報告の概要】

朝鮮三国時代、高句麗・百済は中国から直接仏教を受容した。先行研究において、北朝と密接な関係を有した高句麗は華北仏教を、南朝と密接な関係を有した百済は南朝仏教を受容したと指摘されている。しかし、朝鮮半島で発見された高句麗・百済の仏像様式や仏教銘文の形式は、文献史料とは異なる対外関係のあり方を示唆している。赤羽奈津子氏は、特に高句麗・百済の仏教銘文の形式から、朝鮮と中国の対外関係のあり方について言及した。

現在、確認されている高句麗の仏教銘文は6点、百済の仏教銘文は9点である。それぞれの銘文形式を検討すると、北朝の銘文形式と類似していることが分かる。しかし、北朝の仏教銘文に見られる皇帝（国王）崇拝・鎮護国家に関する語は、高句麗・百済の仏教銘文においては舍利供養など造塔事業と関わる銘文に確認できるのみであり、北朝のように一般民衆によって作られたと考えられる造像銘にはほとんど確認できない。

このような仏教銘文の形式がどのように伝来したかという点について、赤羽氏は北朝からの亡命者・流民がその担い手となった可能性について指摘した。北朝から高句麗への亡命者・流民については『魏書』など様々な史料から確認でき、その中に仏教徒がいたことは「徳興里壁画古墳」の墨書銘から確認できる。ただし、このような亡命者・流民に関する記事が確認できない百済に関しては、別のルートを想定する必要があると赤羽氏は述べた。

報告後、参加者全員で移録の文字の確認などを行った。また、高句麗・百済の仏教銘文は北朝銘文との類似点が多く確認できるものの、独自の思想を反映したと考えられる文章もあることも意識する必要があるという指摘がなされた。

